

今は亡き三好弘博士へ

荒井 良雄

日本ワイルド協会が、創立十周年を迎えようとしているときに、創立メンバーの一人であられた先生を失ったことは、本当に残念です。

二十年にわたる「ハムレット」の研究により、四十六歳で博士号を得た先生は、亡くなる前年に、それこそ生命と戦いながら、身を削る思いで二冊のライフ・ワークを出版なされ、駒沢大学英米文学科の主任の仕事や、ワイルド協会の理事を務められるなど、学なり、功と名をとげた熟年の平安な境地に達しておられました。その先生が、あれほど敬愛しておられ、生涯の研究対象に選んでおられたシェイクスピアと同じ年の五十二歳で亡くなる運命にあったのも、不思議なご縁でした。

ご縁といえば、先生と私の出会いも、そうでした。初めてお目にかかったのは、二十年前、明治学院大学の講師室でした。その頃、私も非常勤講師として、土曜日に出講していたので、授業が終ったあと、目黒駅の近辺で、よくお昼を一緒に、シェイクスピアを語り合ったものでした。共に日本シェイクスピア協会に属していた関係で、関西で開かれた学会へ出かけたと、京都の庭園を散策したことなど、思い出は尽きません。それ以来、先生とご縁は跡切れることなく続き、私の母校である学習院大学へ教えに来ていただいたり、私の編で新樹社から出した『ワイルド悲劇全集』には訳者として参加していただき、「サロメ」と『パデュア公爵夫人』を訳していただきました。丁度その頃、ワイルド協会設立の動きがあって、先生は幹事の一人として創立に参加していただき、協会の発展に尽力なさいました。八王子の大学セミナーハウスで開催した第一回ワイルド・セミナーでは、「サロメ」をめぐってのシンポジアムの講師として活躍なさいましたし、本間久雄先生や矢野禾積先生を囲む会にも一緒しました。最近の十年間は、ワイルド協会の役員会や大会で先生とお目にかかり、ワイルドやシェイクスピアを語り合うのが私の楽しみになっていました。そして、昨年春からは、三神勲先生の後任として駒沢大学へ迎えていただき、先生と一緒に仕事ができると思っていた矢先、新学期が始まって一週間もたたないうちに、虎ノ門病院へ入院、そのまま帰らぬ客となってしまわれました。先生が教えておられた英文学史やシェイクスピアの講座、そして大学院の教え子たちを、そのまま私が引き継ぐことになったのも、ご縁があったからでしょう。

心が豊かで温厚そのものであった先生は、駒沢大学を愛し、シェイクスピアとワイルドを愛し、学問と教育に一生を捧げられました。先生は、常に、今の日本人が失いつつある謙譲の美德を発揮しておられました。大学や学会で、業績を売り込み、自分を売り込むのに汲汲としている人が多い中で、先生は自己の信念を貫き、人を押しつけて前へ出ることは決してなさらず、ひたすら学究の道を謙虚に歩まれました。敬服のほかはありません！

遺著ともいふべき『素足で歩く人たち』（英文学における「ふれあい」の人間学）と『シェイクスピアと日本人のこころ』の二冊は、誠実に人生を生き、努力と情熱で英文学を研究した先生の立派な業績であり、自伝です。

先生とは、日本人の知性と感性でとらえたシェイクスピアとワイルドを、もっともっと語り合いたかった！
ご冥福を祈ります。